歴史民俗資料館だより

矢立

矢立は昔流行した日本の万年筆ともいうべきもので、江戸時代から明治時代の初めにかけて、武士、町人、文人、僧侶などあらゆる階級の人々が腰に差して持ち歩いた筆墨の道具です。平成の今日ではほとんど使用することがなくなり世の中から忘れ去られて姿を消してしまい、相当年配の人でも矢立を知らない人が多いと思います。

▲ 携帯用の筆記具で、綿状の物に墨を含め筆をそえた

矢立の語源は、昔、文字を書く時に矢を立てて矢じりで書いたことや、証文を書くための道具で借権を取り立てる側からすれば、攻めの「矢」、債務を弁済する側からすれば「楯」で、「矢と楯」が変化して「矢立」となった説がありました。しかし、昔の古い辞書には、武士たちが戦場へ行く時に背負って行った「えびら(矢を立てて入れる箱)」の中へ入れて持ち歩いた筆記道具が「矢立」であると記されています。武士たちは、このえびらの中へ、故郷の妻子への便りや旅先で気付いた事柄、歌などを書くために筆と硯を入れて持ち歩いたものです。えびら＝矢を立てて入れる箱の中へ入れた筆墨の道具が変化して、いつのころからか「矢立」と呼ばれるようになりました。これが正しい語源であるとされています。

矢立が使われるようになったのは、戦国時代以降で、「えびら」の中へ入れて持ち歩くという矢立の語源からすると、戦国時代に始まり江戸時代に入って急激に発達したものと思われます。

矢立の原始的な形は筆と硯と墨と水指しとが一つの箱の中に行儀よく並べてあり、これを紐でぶら下げて持ち歩きました。後に筆や硯を箱に入れて持ち歩くのは不便なため、これが改良され、筆筒の先へ墨壺を取り付けて一本の棒のようにしてこれを腰に差すようになりました。更に筆入れと墨壺とを別にして墨壺は美しい紐でぶら下げ、根じめにはさんごやめのう、象牙などの美しい飾りを付けるといういきな形が流行するようになりました。また、形を変えて旅をする時には、行李や挟み箱などの中に他の荷物と一緒に入れて持ち歩くようになり、次第に飾り物のようなものも出てくるようになりました。

矢立は生活必需品だったので金銀を使った高価なものは少なく、その形も各人の好みに応じて千差万別でした。

資料館には、江戸時代の商人の旅道具の一つとして、つり下げ矢立や棒型の矢立を紹介、展示しています。

行政相談 人権相談

人権相談は、自宅でも応じています。

相談の秘密は固く守られますのでお気軽にご相談ください。

人権相談	人権擁護委員	齋藤好子	中川町20	☎387・0812
		保母勝壽	弥生町30	☎387・2782
		後藤　稔	北及1183	☎388・1495
		杉原貴子	中野256	☎388・1496

※行政相談は、現在、行政相談委員が欠員になっていますので、岐阜行政評価事務所（☎246・4411）へご相談ください。